

人生を変える一冊と出会える場所

経済学部長 小 柳 治 宣 (教授 社会保障論)

私にとって図書館は、「出会い」の場であり、「発見」の場である。これまでに、様々な本たちと出会い、そして、その中から多くのことを発見してきた。そこで得られたものは、私の人生を支える大きな力となっている。いわば、いくら使っても減ることのない「知的資産」である。図書館は、この無形の、いくら蓄積しても場所を取ることなく、邪魔にならない財産を得られる宝庫と言っていい。

私が学生時代毎日のように図書館へ足を運ぶようになったのは、これも図書館で出会った一冊の本がその切掛けとなっている。その本とは、『父帰る』や『恩讐の彼方』で知られる小説家であると同時に、文藝春秋社の創立者でもある菊池寛（一八八八～一九四八年）の自伝である。今や、わが国で最も権威のある文学賞とされる芥川・直木賞（一九三五年）を創設したのも、この菊池寛である。

その菊池寛が、自伝の中で、高校時代に図書館にあった四万数千冊の蔵書すべてを「読んだ」と書いていたのだ。ちょっと信じられない話ではあるが、これはわたしの知的好奇心を大いに刺激した。私も挑戦してみようと思ったのだ。だが、日大経済学部の膨大な蔵書を読み尽くすことは、どう考えても物理的に不可能である。そこでとにかく卒業までの四年間で一万冊の本を読破してやろうと決意した。中学生の頃から作家か評論家になることを夢んでいた私は、文学書（小説や詩）を片っぱしから読み始めた。暇さえあれば大学の図書館に陣取って、近くの古本屋で三冊百円で買った文庫本や図書館の文学全集を読むことに没頭した。今は無理だが、若い頃は「寝食を忘れて」一つのことに熱中できるものなのである。

ところが、半年ほどしてあることに気付き愕然^{がくぜん}としてしまった。いくら四六時中活字中毒者のごとく本を読み続けても、一日に五冊も六冊も読めるものではない。一日に二冊が限界で、そうすると、一年に七百冊、四年で二千八百冊にしかない。一万冊達成するには一年に二千五百冊、一週間に五十冊という計算になる。一万冊読破は絶対に不可能なのだ。最初の目標があまりに無謀であったのだ。しかも一冊の本といえども厚いものもあれば薄いものもある。そこで、一万冊の本を読破するのではなく、一万冊の本に触れることへと目標を変更した。どういうことかといえば、本の目次、最初の頁と最後の頁だけに目を通すことにしたのだ。これならば、一週間に五十冊も可能である。その代わり、最初と最後の一行をノートに書き写すことにした。作者が最も大切にするのは書き出しと書き納めだと思ったからだ。最初の頁を読んで興味を引かれたものは、最後まで読めばいいわけである。こうすれば、ふだん手に取らないような本にも気軽に触れることができる。多くの、様々なジャンルの本に触れることで、得られるものは想像以上に大きかった。本との交友録とでもいえる「最初の一行ノート」を書き続けるうちに、様々な文体の文章を学ぶこともできる。今思い返してみると、読むことと書くことの基礎的な力を、私は、この「一万冊の本に触れる」という目標を達成する過程で自ずと身に付けたのであった。そして、その中から「人生を変える一冊」に出会うこともできた。その一冊が、幸田露伴の『努力論』（岩波文庫）である。決して読み易くなく、文章も内容もかなり手強い^{てごわ}。だが、それが逆に知的な刺激を喚起するのだ。行間から発せられる作者の知的情熱と含蓄の深さに圧倒される。読んでいると背筋がすっと伸び、自信も湧いてくる。努力することの意義と、努力は必ず報われる——と力強く主張するこの本は、私の生き方を変えてくれた一冊でもある。そうした一冊の本に諸君も是非、学生時代に出会って欲しい。そのためにはまず一冊でも多くの本に触れることである。